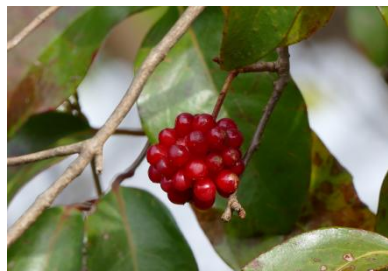


<暖冬?>このところ“大雪(たいせつ)”から“冬至”に向かう時期にしては寒い日がほとんどありません。そのせいでしょうか、ようやく天狗の団扇のような“ハリギリ”の葉が色づき始めました(右写真)。風の強い日があったにもかかわらずカエデなどの紅(黄)葉が長持ちしているのもそうでしょう。一方、常緑広葉樹の多いところでは例年のように晩秋から冬の暗い緑



<サネカズラの実>

の景色です。

<葛(かずら)の春秋>そんな中でひときわ目を惹くのが“サネカズラ”の真っ赤な実です。見るからに美味しそうですが食べられません。サネカズラの花は夏に咲くのですが緑に埋もれていたため



<スイカズラの実>

か見過ごしていました。この葛は“ビナンカズラ”とも云われ樹皮から採れる粘液を整髪に使ったようで、「さね葛のちも逢はむと 夢のみに うけひわたりて 年は経につつ(柿本人麻呂、万葉集)」や「名にしおはば 逢坂山の さねかづら 人に知られで くるよしもがな(三条右大臣、百人一首)」など万葉の昔から歌に詠まれています。ただ“さねかずら→小寝(さね)→寝る”という語呂合わせで、実や花を詠ったものではありません。一方、葛(かずら)でも“スイカズラ”は晩春に佳い香りを漂わせる花が主役です(No.40 参照)。枝の先にぽつぽつと付いた黒い実は目立たず、冬を耐える葉と共に“忍冬(にんどう)”の名にふさわしいように思えます。

<造形>今までも時折紹介していますがいろんな植物の虫こぶの姿は自然が創る何とも不思議な造形です。ここでは雑木林の縁辺で見つけた“ヤブレガサ”の堅い虫こぶを載せました。ミバエ



<ヤブレガサの虫こぶ>



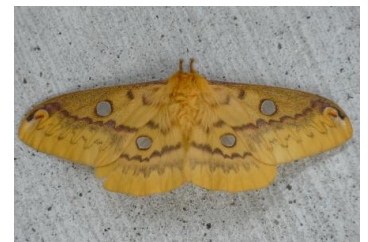
<ヤブミョウガの実>

の仲間が卵を茎に生み付けたものです。もう一つは虫こぶでなく、人の手では造れない自然の宝珠、“ヤブミョウガ”の実です。

<日差しの中で>アキアカネの群がいなくなって随分と経ちますが、何とか命をながらえている個体が天気の良い日に姿を見せました。可哀そうに冬は越せないようです。また壁に張り付いて



<アキアカネ>



<ウスタビガ(ヤママユの一種)>

動かないのはウスタビガです。おそらく先月羽化したものでしょう。(文と写真: 松本正勝)